

「また、いつか…」と嘘つきディアナは言った。

「『また、いつか…』と嘘つきディアナは言った。」

上演時間 60分

(女3) または 男2/女2) 一幕七場

あらすじ

空爆にさらされたある日、偶然ヒロとマオは無人の倉庫で一体のAIを見つけ、親友になる誓いを交わす。マオはそのAIにディアナと名付けた。AIのことは二人の秘密だった。そこにハルカが入り込み賑やかな秘密基地ごっこが始まる。

しかし、ハルカは病気で間もなくこの世を去った。AIを作った科学者チヒロはハルカの母親だった。ディアナ、ルナ、プロセルピナの三体はこの社会を司るAIだった。しかし、ディアナが北海道を消滅させるという裁断を下したため、北海道はこの世から消えた。そのことに衝撃と悔いを感じたチヒロはディアナを幽閉、たった一言だけしゃべれるロボットにしまった…。時は流れ、反政府組織のリーダーとなったマオと政府軍に入ったヒロはあの倉庫で再会する。

上演記録

平成二十七(2015)年度 山梨県高校演劇大会 優秀第二席(県第三位)

舞台美術賞

連絡先

t040125@yahoo.co.jp

はやおとつじ(砂澤雄一)



上野原高校演劇部 県大会参加作品（二〇一五年）

石井凜華・加藤さやか・加藤祐実・はやおとうじ 作

「また、いつか…」と嘘つき ディアナは言った。

登場人物

武蔵川ヒロ……………

山口マオ……………

篠崎ハルカ……………

鳴海チヒロ……………

ロボット（ディアナ）…〔声〕

0

人気の無い薄暗い倉庫。壊れた天窓から光りの筋が三本降り注いでいる。中央に壊れたロボット。その目が次第に明るく輝く。

ロボット 「また、いつか…」

ロボットの目がまた暗くなっていく。

1

人気のない薄暗い倉庫にヒロがサッカーボールを持って入ってくる。驚いたように当たりを見回す。

ヒロ これって…

階段を降りる。

ヒロ こんな所があつたなんて…

遠くに落ちる爆弾の音

ヒロびっくとして

ヒロ また、爆撃だ。タクマンちの方だ。

「また、いつか…」と嘘つきディアナは言った。

ロボットがつぶやく

ロボット また、いつか…

ヒロ わーっ

慌ててそこら辺に隠れる

ヒロ 誰かいるのか？

おそろおそろ出てくる

ヒロ …

ロボットを見つけ、こわごわ近づく

ヒロ 今、口きいたのは、お前か？

ロボット また、いつか…

再び逃げ腰になるヒロ

そこにマオが本とノートを抱えて入ってくる

ヒロ え

マオ 誰だ！

ヒロ お前こそ誰だ！ あーっ、お前ウチのクラスの…名前忘れた、いけすかない奴

マオ 同級生なのか？

ヒロ お前、クラスの人気者を知らないのか？

マオ …知らない

ヒロ 何だよ、あ、そうだ！お前に言いたいことがあったんだ！

マオ 僕の方は君に何の用もないし興味もない。かまわないでくれ。ここは僕だけの秘密の場所だ。出て行ってくれ！

そこへ再び爆発音、今度はさつきよりも近い

マオ 防空システムはどうしたんだ…。どんどん爆撃が増えてるじゃないか

「また、いつか…」と嘘つきディアナは言った。

遮るように

ヒロ おまえ、タクマのこと、学級会でつるし上げたよな

マオ ……何のことだ

ヒロ 忘れたのか？昨日、学級会でおまえはタクマのことをみんなの前でつるし上げにしたよなと言ってるんだ

マオ 何のことかと思えば、ばかばかしい。いいかね…

ヒロ 確かにおまえにとっては、ばかばかしいことかもしれない。

マオ ちっ、いいかね

ヒロ 「ちっ」じゃねーよ

マオ (イライラして) 僕が喋ろうとするのを邪魔するな

ヒロ あほかおまえ。世界が自分を中心に回っているとも思ってるのか

マオ ! なんだと

ヒロ タクマのこと、おまえは知らないだろ

マオ ああ、知らないね。知りたいとも思っていない。

ヒロ そうだよな、おまえはうちのクラスの連中のことには何の興味もないだろう

マオ ……何が言いたいんだ

ヒロ おまえは自分のことで一杯だ

マオ 話の途中で悪いが、タクマくんは校則違反を犯したんだよ、それを指摘していった何が悪いんだ。意味がわからないよ。

ヒロ ……おまえタクマがなぜ校舎のガラスをあんなに割ったのかわからないだろ

マオ ……わからないね。ただ

ヒロ ただ？

マオ 例えば、殺人を犯した人間にどんな事情があつとしても、その罪が許されるわけではないだろう

「また、いつか…」と嘘つきディアナは言った。

ヒロ おまえの完璧な「理論」とやらだと、そういう結論が機械のように出てくるんだろうな…

間

ヒロ タクマには兄貴がいたんだ。

マオ それで

ヒロ この間死んだ

マオ …それはお気の毒に、しかしだから何だって言うんだ

ヒロ なぜ死んだと思う？

マオ さあ、わからないよ。それに死に方が重要だとは思えない

ヒロ おまえ、やっぱ、ダメダメだな

マオ 何だと

ヒロ タクマの兄貴は、この間の戦争で死んだんだ

マオ !

間

ヒロ 確かお前の兄貴もこの間の戦いに志願兵として出征していたよな

マオ やめろ

ヒロ 生きて帰った者はいなかった…タクマの兄貴も、そしてたぶんお前の兄貴も…

マオ うるさい!

ヒロ お前なら分かるんじゃないか？タクマの気持ち。なのにどーしてあんなこと

マオ うるさい うるさい うるさい!

それ以上喋るな、君こそ人の気持ちなんか分からないだろう

ヒロ ああ、確かに。でも俺はわかってやりたいんだ、タクマのこと

マオ 僕には関係ない

ヒロ お前、頭良さそうだからよ、教えてくれ。この国はいつたいていどうなってるんだ？

「また、いつか…」と嘘つきディアナは言った。

マオ どういうことだ

ヒロ だっておかしいだろう。俺たちの町が空襲に合うなんて。戦争は、極々限られた戦闘区域で行われたいるんじゃないのか

マオ ……

ヒロ それによ、お前の兄貴も参加したこの間の戦いだけど、あれ、いったい誰と戦ってたんだ、誰が敵だったんだ？

マオ ……それは…

マオ おかしいだろう、やっぱ。戦闘は無兵器を使って局地戦で行われてるんだろ、で例のローマ神話の女神の名前がついた三台のA I、ルナ・プロ…プロ…

マオ プロセルピナ！そして最後の一台はディアナだ

ヒロ それだよ、それ。その優秀な三台が、じっくり考えて作戦立てて戦争してるんだろ。生身の人間がかり出される理由なんて無いじゃないか？

マオ ……

ヒロ しかも、もっとわからないのは戦場へ出て行った兵士は全員が志願兵だったってことだ。お前なら行くか、国のために？俺はイヤだね、死にたくねー

マオ ……

ヒロ 前の兄さんや、タクマの兄さんは命に代えてもやらなきゃならないことがあったってことだろ。それは何だ？教えてくれ、お前、弟だろ

マオ やめてくれ 僕だって、…僕だってわからないんだ。あんなに優しくて人を傷つけたりしたことなかった兄さんが…自分から戦場に行くなんて

ヒロ やっぱ、お前も知らないのか

再び爆裂音 先ほどより近い。二人は少しよろける。

ヒロ 大丈夫か、おい、どんどん近づいてくる。もしかしたらここに落ちるんじゃないか。ヤバイよ。出ようぜ

マオ 動こうとしない

ヒロ おいつ！ボヤボヤしてたらあの世行きだぜ

「また、いつか…」と嘘つきディアナは言った。

マオ 僕はここにいる

ヒロ なぜだよ

マオ ここを離れたくない

ヒロ お前、頭大丈夫か。えっ

マオ、ロボットの方へ歩み寄る

ヒロ まさかこのロボットのため？

よしとけ、よしとけ。これな、ぶっ壊れてる

『また、いつか…』しか言えないオンボロだよ

マオ 君は知らないと思うが

ヒロ 馬鹿にするな、ロボットだろ、見りゃわかるよ

マオ そうじゃない。このロボットは

ヒロ 知っているのか？

マオ ああ

ヒロ なんなんだよ

マオ いや

ヒロ もったいつけないで教えろよ

急に振り向き

マオ おい、このロボットのことは僕たち二人だけの秘密にしないか

ヒロ 何だよ、急に

マオ お願いだ。そうしよう。誰にもこのことは言わないことにしよう

ヒロ なぜだよ

マオ …

ヒロ おまえはこのロボットについて何か知っていて、それを独り占めしたいんだろ。だ
けどまたま俺が入り込んで見ちゃったから計画が崩れたんだ。で、友達でもないのに、
友達のふりして秘密を守らせようと…

「また、いつか…」と嘘つきディアナは言った。

マオ わかった、このロボットのことは説明する。でも…、君と友達になりたいという僕の気持ちも決して嘘じゃない

ヒロ またまた

マオ 信じてくれなくてもいいよ。でも、本当だ。

ヒロ なぜ、急に

マオ 僕に意見を言ってくれたのは

ヒロ …

マオ 死んだ兄さん以外では 君がはじめてだからだ

ヒロ …

マオ うれしかったんだ…、だから友達になりたい。ロボットとは関係ないよ

ヒロ …信じろと？

マオ 君に任せる

ヒロ よし、友達になる。ロボットのこと知りたいし

マオ そこかよ

ヒロ まあな、それになんかおまえとならうまくいきそう

マオ またまた

ヒロ ただし

マオ ただし？

ヒロ どうせなるなら、ただの友達はいやだ

マオ …？

ヒロ 親友になろう

マオ 親友？

ヒロ そう

「また、いつか…」と嘘つきディアナは言った。

マオ いやそれは…自信ないよ、ただの友達だって持ったことないのに、いきなり上級バージョンは…

ヒロ ばーか。親友になるのにやりかたなんかあるか

マオ でも…それに初めてできた友達だから、やっぱ初級バージョンから

ヒロ ははは、おまえ結構度胸ないな

マオ 何だと

ヒロ やつてみようぜ

マオ でも…

再び爆発音 かなり近い。二人は転ぶ。
その時ロボットが

ロボット 「また、いつか…」

マオ、ロボットに歩み寄る。そしてヒロを振り返り、じっと見つめる。

ヒロ 何…見てんだよ

間

マオ 僕たちは親友なのかい

ヒロ ま、それはこれからしだいで、親友になるかもしれないし、なれないかもしれないし

マオ じゃあ、なろう

ヒロ なんだよ、さつき言ってたのと違うじゃないかよ

マオ なろう 僕、努力するよ、どうすればいい

ヒロ どうするって、マニュアルがあるわけじゃないからさ…

マオ 教えてくれ、いや、教えて下さい

ヒロ ー、じゃあ、一つ約束してくれ

マオ いいとも

ヒロ 嘘はつかないこと

マオ そんなことでいいのかい

ヒロ そんなことって

マオ 大丈夫だよ、僕は嘘は言わない。ホントのことしか言えない質^{タチ}なんだ

ヒロ そうらしいな。じゃあ誓いの言葉を言おう

マオ 誓いのことは

ヒロ そ、俺の言うとおりに言えよ

私、武蔵川ヒロと

マオ え、君、武蔵川って名前だったの？

ヒロ ダーッ、やっぱ、お前、俺の名前知らなかったのかー

マオ うん

ヒロ 名前も知らなくせによく親友になるなんていうな

マオ ごめん…でも最初になろうと言ったのは武蔵川君じゃないか

ヒロ ヒロでいいよ。ま、そうだけどさ…。続けるぞ

マオ ああ

ヒロ 私、武蔵川ヒロと はい

マオ はいって

ヒロ お前の名前を言うんだよ

マオ そうか。私、山口マオは

ヒロ 女みたいな名前だな

マオ 名前を悪く言うな。僕は好きなんだ

ヒロ わりー、よく考えてみたらいい名前だな

マオ いいよ、もう。それで続きは

「また、いつか…」と嘘つきディアナは言った。

ヒロ あ、そうだそうだ。山の神、海の神、空の神、地面の神

マオ ずいぶんいるんだね、神様

ヒロ そうなんだ、それに順番を言い間違えると効き目がなくなる

マオ そうなの？

ヒロ どこまで言ったっけ

マオ 地面の神様

ヒロ ありがとう、後は池の神、沼の神、丘の神、道の神、雲の神

マオ ありすぎだろ

ヒロ いいの、…に誓って言います。私たち二人はどんなことがあっても嘘はつきません。

マオ どんなときも？自信ないな…

ヒロ おいつ！誓う前から何諦めてるんだよ

マオ そうだった。でも…親友同士って絶対嘘をつかないものなのかな？

ヒロ 当たり前だろ。嘘つく奴なんか友達じゃないだろ

マオ ウン…：そうだね

ヒロ じゃあ二人で最初から言うぞ。絶対に順番間違うなよ。

マオ ヒロこそな

ヒロ うるせー。いくぞ

ヒロ・マオ 私、武蔵川ヒロと山口マオは、山の神、海の神、空の神、地面の神、池の神、沼の神、丘の神、道の神、雲の神に誓って言います。私たち二人はどんなことがあっても嘘はつきません。

二人は柏手を3回打って頭を下げる。

ヒロが頭を上げようとするとまだマオが必死に祈っているのであわててまた頭を下げる。

ヒロ これで、俺たちは嘘をつけなくなった。

「また、いつか…」と嘘つきディアナは言った。

マオ そうだね

強烈な爆発音 今度は二人吹き飛ばす 転びながら

ヒロ やべー、これ、マジやべーって！

しかしヒロは楽しそうにマオを見る。二人とも地面にはいつくばりながら

ヒロ はあ、はあ（息を切らしている）お前、好きな奴いる？

聞き取りにくいので大声で話す二人

マオ いきなりかー、しかも最初の質問がそれかー

ヒロ ははははは、嘘はなしだぜ

ヒロ、匍匐前進でマオに近寄り、腕にはめていた黒いリストバンドをマオに差し出す。

マオ くれるの？

ヒロ 親友の印だ。マオも何かくれ

マオ うん、じゃあ…

マオはペンダントを外す

マオ 兄さんからもらったんだ

ヒロ いいのかよ

マオ 一番大切なものを親友の印にするよ。

ヒロ そうか、わかった。ところで…

マオ わかってるよ。好きな子の名前を言うんだよね。でもその前に、このロボットについて話すよ

ヒロ おー、そうだった。このロボットにはどんな秘密があるんだよ

マオ 誰にも言うなよ、ヒロ。

ヒロ いわねーよ。俺を信じろ。親友だろ

マオ このロボットはね…

「また、いつか…」と嘘つきディアナは言った。

小さな爆発音が続く
暗転

2

ハルカ 素敵な秘密基地ね

ヒロ どうしてあついここにいるんだよ？

マオ しらないよ。僕が来たらもういたんだ

ヒロ お前、ウソ言っていないよな

マオ 言っていないよ。親友の誓いは絶対だ

ヒロ おうよ。でも、じゃなぜ、あいつ

ハルカ 最近、ヒロ君とマオ君がよく二人でいるから

ヒロ へ？

ハルカ 私、興味持ちちゃって

マオ 僕たちに？

ハルカ うん。だって、あんなに仲が悪かった二人が

ヒロ そんなに悪かったか？

ハルカ ええ、そりゃあもう

ハルカ、楽しそうに笑う

ハルカ なにかあるたびにヒロ君がつかかって、マオ君が無視して

マオ え、僕は無視なんか

ハルカ そんな二人が急に仲よくなっちゃって

ヒロ いや、そんなんじゃないやねーって

マオ そうだよ

ハルカ 女子の一部ではずいぶん話題になってたわよ

ヒロ えっそうなの！ たとえば誰

マオ よせよ

ヒロ だって知りたいだろう

マオ …まあね

ハルカ (大きい声で) あやしい

ヒロ・2 えっ！

ハルカ と私は思って、後をつけてみた

ヒロ ストーカーかよ

ハルカ ごめんなさい。でも知りたかったの

マオ なにを

ハルカ どうしたらあんなに楽しそうになれるのか

マオ 楽しそう？僕たちが？

ハルカ うん。見ていてこっちが微笑ましくなるくらい。だから、どうしたらそうになれるのか知りたかったの。

ヒロ それでストーカーかよ

ハルカ 思った通りだった

マオ 思った通り？

ハルカ きっと秘密基地みたいな所があって、そこはとってもミステリアスで、男の子の好きそうなものがゴロゴロしてて、

ヒロ 妄想かよ

ハルカ そして、秘密のアレがある

ヒロ・マオ !

マオ 秘密のアレ？

「また、いつか…」と嘘つきディアナは言った。

ハルカ 思った通り

ヒロ お、おい。なんだよ秘密のアレって

ハルカ 隠してもむだよ！

マオ なんかキャラ変わってませんか

ハルカ それが二人の仲を急速に近づけた。私の推理に間違いはない。

ヒロ ひ、秘密ってなんだよ。言ってみろよ

ハルカ それは

ヒロ それは？

ハルカ それは

マオ それは

ハルカ これよ

ハルカ、ガラクタをを指さす

ヒロ・マオ ダー！

ヒロ ああ、よかったロボットじゃなくて

マオ おい

ハルカ …というのは嘘で

マオ ウソなの？

ヒロ きたねーぞ

ハルカ これね

ロボットをさす

マオ ヒロがロボットって言うから

ヒロ あほか、普通誰だってここに来れば最初に気づくだろう

ハルカ、楽しそうに笑う

「また、いつか…」と嘘つきディアナは言った。

ハルカ 本当に二人は仲がいいね。…うらやましい

マオ うらやましい？

ハルカ ええ

ヒロ このロボットは二人だけの秘密だ。お前、入ってくんな

マオ そんな、こどもみたいに

ヒロ どうせ俺は「おこちゃま」だよ。へん

ハルカ えー、私も仲間に入れてほしいな

ヒロ えー、私も仲間に入れてほしいな…ダメ！

マオ 仲間になるには誓いを立てなきゃダメなんだ

ヒロ おい、勝手に秘密をばらすな。こんな奴、誓いを立てたっていれねーよ

ハルカ 誓いって

ヒロ おい！ダメだって

マオ いいじゃないか

ヒロ だめ。ここ、俺とマオだけの秘密の場所だろ

マオ そうだけど。でも

ハルカ、泣きだす

マオ 泣いちゃった

ヒロ ダメなものはダメ。大体女なんてすぐ泣くんだよ

マオ そんな言い方ひどいよ

ヒロ ひどくねー。どうせ泣きまねだよ。

ハルカ泣き続ける

マオ 泣きまねじゃなさそうだよ

「また、いつか…」と嘘つきディアナは言った。

ヒロ お前だまされてるんだよ

マオ そんなふうにはみえないけど

ヒロ 甘いんだよ

ハルカさらに泣く

マオ 可愛いそうだよ

間

少年 あーっ、もう。わかったよ、わかった。仲間に入れてやるよ。これでいいんだろ

ハルカ、泣きまねをやめて

ハルカ え、いいの。私仲間になれるの

マオ 泣いてない

ヒロ あー、やっぱうそ泣きかよ

マオ だまされた…

ヒロ だから言っただろ。おめー甘いんだって

マオ ……ショック、立ち直れないかも

ヒロ こいつストーリーカーで詐欺師だぜ

ハルカは全然おかまいなしで

ハルカ ねねね、誓いつてなに

ヒロ ずーずーしい奴だな

マオ 僕、女子の見方が変わりました

ハルカ 教えて、お願い

ヒロ 教えて、お願い…ってかわいくないんだよ

マオ 嘘をつかない

ハルカ え？

マオ 嘘をつかないって誓うんです。でも、あなたには無理だ。

ハルカ え

マオ 今、あなたは僕たち二人をだましましたよね

ヒロ 結構根に持つタイプ？

マオ そんなあなたには無理だと僕は思います

ハルカ ごめんなさい

ヒロ ごめんなさい…って、全然心こもってないんだよ

マオ …わかりました、許しましょう

ヒロ え、許しちゃうの？お前、だまされやすいなー カモだなカモ

マオ ただし、本当に心から誓わなければ仲間には入れません

嘘をつかないってすごく大変なことだよ

ヒロ えー、マオ、「そんなことなの」とか言ってたじゃん

ハルカ …そうだね。ウソつかないって本当に大変なことだよね…

マオ できますか

ハルカ 頑張ってみる

マオ 頑張るじゃダメです

ヒロ おっ、いいね。入れるな入れるな、女なんて

ハルカ 約束する

マオ 本当ですね

ハルカ ホント

マオ いいでしょう

ヒロ いいのかよ。マオ、だまされてるって

ハルカ ヒロ君、ひどい

「また、いつか…」と嘘つきディアナは言った。

ヒロ ヒロ君、ひどい…って、お前のしたことの方が百倍ひどいけどな

マオ ヒロ、ひどいよ

ヒロ えーっ、マオ、お前まで、そんな。傷つくー

ハルカ じゃ誓いを立てましょう

ヒロ 調子乗ってンじゃねーぞ

マオ 3人で声を合わせて誓いの呪文を言うんだ。順番を間違うと効き目がなから注意して。ヒロもね

ヒロ 俺がこの間おしえてやったんじゃねーか

ハルカ わかった。ヒロ君すっかりね

ヒロ うるせー

マオ 私、山口マオと、武蔵川ヒロ、そして篠崎ハルカは、山の神、海の神、空の神、地面の神、池の神、沼の神、丘の神、道の神、雲の神に誓って言います。

ハルカ ずいぶん神様いるのね。でも、池や沼があるなら川の神様とか湖の神様とかもいた方がよくない？

ヒロ これ以上複雑にするなー

マオ いいですよ。じゃあ川の神と湖の神も追加。

ヒロ えー、どうしてこいつの言うこと聞くんだよ。じゃあさ、俺も提案していい。

マオ どうぞ

ヒロ えーとね、えーとね、下水の神

ハルカ 却下

ヒロ うるせー

マオ いいですか。では、僕の後について間違えなく言ってください。

ハルカ わかった

マオ 私、山口マオと、武蔵川ヒロ、そして篠崎ハルカは、山の神、海の神、空の神、大

「また、いつか…」と嘘つきディアナは言った。

地の神、川の神、湖の神、池の神、沼の神、丘の神、道の神、雲の神に誓って言う。私たち三人は、将来どんなに違う道に進み、考え方が変わってしまったとしても、友を尊敬し、最も大切な場面では、絶対にウソをつかないことを誓う。

ヒロ マオ…

ハルカ わかった。私言うわ

ヒロ 将来違う道ってどういうことだよ。なあ、マオ。考え方が変わってしまうって、どういうことだよ。お前なに考えてるんだ。

マオ ヒロ、どうする。誓うか。

ヒロ それが親友であるお前の願いならな

マオ 僕たち三人はいつまでも、秘密基地で無邪気に遊ぶこどもではいられなくなる。

ヒロ 俺はそうは思わない

マオ 僕の兄さんがなぜ戦場に行ったか。それは、きっと命をかけても守らなくてはならないものがこの国にはあるからだと思う

ヒロ マオ…

マオ 僕はそれが何かをつきとめたい。僕たちは今のままではいられないんだ

ヒロ 俺はこの戦争にはなにかとんでもねー、やばいカラクリがあるように思えて仕方がねえ

マオ からくり？

ヒロ それにみんながありがたがっているAI、あれも怪しいと俺は思う

マオ ……

ヒロ だけど、それがお前の願いなら、ここで誓いを立てよう。

マオ ありがとう。

ヒロ・マオ・ハルカは横に並ぶ。

ヒロ・マオ・ハルカ 私、山口マオと、武蔵川ヒロ、そして篠崎ハルカは、山の神、海の神、空の神、大地の神、川の神、湖の神、池の神、沼の神、丘の神、道の神、雲の神に誓って言う。私たち三人は、将来どんなに違う道に進み、考え方が変わってしまったとしても、友を尊敬し、最も大切な場面では、絶対にウソをつかないことを心から誓う。

マオ 僕たち三人は親友だ。たとえどんな時代がやってきたとしても

ヒロ マオ、俺たちは変わらない。永遠にな。この女はどんどん変わるかもしれないけどよ

ハルカ ぶー。いいわよ。私なんか、ものすごくきれいになってうーんと変わっちゃうんだから。ヒロ君なんて相手にしないんだから

ヒロ こつちから願ひ下げだぜ。お前がかわいくなくなるなんてゼツテあり得ない

ハルカ きつと後悔して泣くわよ、あなた

マオ ぼくだつてずっとこのままがいいと思ってるよ

ヒロ・ハルカ マオ〔君〕：

ハルカ ね、このロボットの名前、なんていうの

マオ 名前、そうか、名前なかったな

ヒロ ああ、ロボットつてずっと呼んでたから

ハルカ ディアナつて言う名前にしない

マオ えっ！

ヒロ なんでお前が決めるんだよ、それにカッコわるいよ。もっと強そうで、カッケー名前にしようぜ、な、マオ

マオ ディアナ？ ああ、そうか、ディアナだったのか

ヒロ おい、マオ？

マオ そうか、そうだったのたか

ヒロ おい、どうしたんだよ。なに勝手にわかってるんだ

マオ 君は一体？

ハルカ え、いいの。やったー。じゃあ、ディアナできまりね、うれしー

ヒロ 勝手に決めるなよー

ヒロ、ハルカを追いかけ回す

マオ立ち尽くす

3

舞台は一変して過去になる。

チヒロ ディアナ、外は雪よ。寒いわけね。

ディアナ …

チヒロ ま、あなたなら、この雪も何日も前からわかっていたか

あいかかわらず無口なのね。人に話しかけられたら返事するのが礼儀というものよ

ディアナ …

チヒロ 世界に三台ある自己連想記憶型フアジーシステムを持つAIにつけられた名前は、ルナ、ディアナ、プロセルピナ。満月、新月、欠ける月。ローマ神話よ。三人の女神は一人も欠けてはいけない。一人でも欠けたら、月は永遠に満ちることも欠けることもできなくなる。つまり…私たちは生きていけなくなる…

ディアナ …

チヒロ でもディアナ、あなたは今ここにいる

ディアナ チヒロ

チヒロ あなたが去った日から世界は少しずつ壊れ始めている

ディアナ 私は嘘をついた

チヒロ ええ、あなたはあの時、嘘をついた。だって、あなたが嘘をつくようにしたのは私なんだから。あなたは世界初の嘘をつけるAI、いいえ良心の呵責に苦しむAIなの

ディアナ 苦しい

チヒロ 苦しいですって…。いまさら何を言っているの、ディアナ。いまさら…
あなたが最初についた嘘覚えてる？

ディアナ もう許して、チヒロ

チヒロ あなたは、「今日は雨、傘が必要ね」って私に言ったのよ。外に出たら真っ青な空。どう見ても雨なんか降りそうもなかった

ディアナ ごめんなさい

チヒロ　そしてあなたはこう言ったわ。「チヒロ、だまされちゃったね」って。そしてあなたはクスクス笑った。子供みたいに…

ディアナ　…

チヒロ　私はうれしかったのよ。だって自分の設計したロボットが、本当に嘘をつく瞬間を見たんですもの。あなたが子供のように笑っているのを見て、私も思わず笑ってしまったわ…

でも、それが何を意味するのか、私にはその時まだわかってなかった。あなたは面白がるようにルナやプロセルピナにも嘘を着き始めた。

ディアナ　…

チヒロ　そしてあの日、あなたは決定的な嘘をついた

「明日も雪、きつと積もるわ」って。悪戯っ子のように笑いながら

ディアナ　…

チヒロ　私は思った。ディアナがまた嘘ついている。明日は雪なんか降らないんだ。積もったりしないんだって

ディアナ　チヒロ…ごめんなさい

チヒロ　でも、雪は降った。雪は降ったのよ。ただ、その雪が積もるべき大地の方はなくなってしまった…

ディアナ　…

突然人格が変わったかのようにチヒロははしゃいで言う

チヒロ　せっかくだもの、雪だるまでもつくりましょうよ。雪合戦もいいわね

私、小さいとき、雪だま作りの名人だったの。投げるのは下手なんだけど、つくるのはうまいのよ。だから、クラスメイトは雪合戦が始まると私の争奪合戦をしたものだけ。兵器製造マシンだったってわけ

私、北海道で生まれたの。大好きだったな。北海道が。鹿とかリスとか。キタキツネ？私の家の周りにいたの。かわいいのよ。見たことある？

ちようどあの日、今日みたいな雪の中、鹿のこどもがじっと私の方を立ち止まって見た。何か訴えかけるような目で。野生の動物たちはわかってたんだわ。今日でこの島が地上から消滅することを

ディアナ　…

チヒロ　私はあなたが嘘をつけるようになったことを喜んだ自分を憎んだ。あなたの裁定でふるさとが一瞬で蒸発したこと、悲しみは、どんなに時がたっても消えはしない…。自

「また、いつか…」と嘘つきディアナは言った。

分が手がけたAIによって自分のふるさとが奪われてしまうなんて
私はあなたが憎い。どうしても許すことができない。
あなたはここで朽ち果てるの。誰にも知られず、世界を窮地に追い込んで…
安心して、私も一緒にいてあげる。自分のしでかしたことの重さに震えながら、私もこ
こで死んで行くわ。私もあなたもここで死ぬの

4

ハルカ　じゃあ、お葬式ごっこね

ヒロ　どうして秘密基地でお葬式ごっこしなきゃならないんだよ？

マオ　だってヒロが女と一緒に「ままごと」なんかできるかって言うから

ヒロ　当たり前だろ、秘密基地でままごとする奴なんていねーだろ

マオ　そしたらハルカさんが…

場面は十分前

ハルカ　えー、ままごとがいい

ヒロ　お前、秘密基地でままごとってどんな頭してんだよ

マオ　そんな言い方しなくても

ヒロ　じゃあお前は「ままごと」したいのかよ

マオ　いや…そんなわけじゃないけど

ハルカ泣き始める

マオ　泣いちゃった

ヒロ　ばーか、もうその手はくわねーよ

ハルカ、更に泣く

マオ　かわいいそうだよ

ヒロ　お前、学習能力ないのかよ

マオ　だけど

ヒロ 泣きまねにきまつてるだろ

マオ そうだけど

ヒロ 全部失う奴だな、お前。ゼーんぶ、この女に奪われんぞ

ハルカ 更に泣く

ヒロ 俺はゼツテーだまされないぞ、女と一緒に「ままごと」なんかできるか

ハルカ 急に顔をあげて

ハルカ じゃ、結婚式ごっこは

ヒロ はあ？

ハルカ 結婚式ごっこしよ

ヒロ なんで秘密基地で結婚式するんだよ、それによ、結婚式ごっこだって、結局「ままごと」の一種じゃねーか

マオ そうですね、するどい

ヒロ 感心してる場合か

ハルカ ちがうもん、結婚式ごっこはままごとじゃないもん

マオ どう違うんですか

ヒロ きくなー！ 毘だよ毘

ハルカ ままごとってね、日常を描いているわけ、わかる。だけど、結婚式は非日常って
いうか、普段とは違う「ハレ」の日を描くのよ

マオ な、なるほど

ヒロ わざと難しい言い方してこいつを納得させようとするな

ハルカ で、新郎はマオ君で

ヒロ 勝手に決めんなー

ハルカ 新婦は、えへへ、私

ヒロ なにがえへへだよ

「また、いつか…」と嘘つきディアナは言った。

ハルカ で、牧師さんと、司会者と、友人代表がヒロ君

ヒロ はい却下、俺はその他大勢かよ、ふざけんな

「だめ、絶対だめ。」「結婚式ごっこ」は法律で禁止

マオ そんなこどもみたいな

ハルカ えー、じゃあ、お葬式ごっこは

ヒロ だから、わからない奴だなー、結局それも「ままごと」の一種だろ

ハルカ マオに真剣な顔で説明する

ハルカ つまり「お葬式ごっこ」っていうのは日常とは違う、非日常の世界がもつとも顕著な形で表れる瞬間なのね

マオ な、なるほど

ヒロ お前たち、それワザとか、二人で俺を陥れようとしてるだろ

ハルカ じゃ、お葬式ごっこね

えっと、私が若くして夫を事故でなくした未亡人、マオ君が、夫の親友で、昔私に恋心を抱いていた同級生、で、ヒロ君が遺体とお坊さんと参列の人ね

ヒロ 俺はその他大勢かよ、ふざけるな、それになんだよ、その設定。葬式の日から新たな恋が芽生えそうな、ミダラでフキンシンな設定は。

ハルカ ヒロ君ってこどもね

ヒロ お前と同じ年だけどな

マオ まーまー、二人とも

ヒロ マーマーじゃねえよ

マオ どうでしょう。ここはハルカさんの意見を尊重してお葬式ごっこをしましょう

ヒロ 裏切り者！

マオ ただ、昼ドラマみたいな設定はやめて、外国のお葬式みたいに墓地に埋葬される誰かをみんなで見送る、ということでは

ハルカ すてき、私も、雨の降る午後、とっても広い、十字架がたくさん並んでいる墓地でひっそりとするお葬式がいいなーっ思ってたの

ヒロ 思ってたんなら言えよ、で、誰の葬式？

マオ そうですね、誰のお葬式なんですか、ハルカさん

ハルカ え

ヒロ 考えてねーのかよ、フキンシンな設定以外は

ハルカ …

マオ じゃあ、僕が提案してもいいですか

ヒロ 変なのダメだぞ

マオ 兄さんのでもいいかな

ヒロ・ハルカ …

ヒロ いいのかよ、マオ

マオ うん…兄さんには伝えなかったことがたくさんあるんだ。でも僕、お葬式の時はお頭の中が混乱しちゃって、ちゃんとお別れできなかったから…

ハルカ お兄さん、この間の戦いで

マオ うん、そうなんだ。僕、兄さんが自分から志願して戦争に行くなんてどうしてもわからなくて

ヒロ マオ…

マオ 兄さんとは年が離れていたから、兄弟げんかなんかしたことなかったんだ。もう、おとなでいつも僕のことを優しく見守ってくれた。

そうそう、僕が小さい頃はよくお話してくれた。兄さんの話す桃太郎はちょっと変わっていて、主人公が鬼の子供だった。鬼の子供はお父さんの鬼が桃太郎に退治されてひとりぼっちになっちゃうんだ。僕は悲しくって泣いたよ。

ハルカ 優しいお兄さんだったのね

マオ うん。僕が自分勝手なことを言うと、ちよつとだけ怖い顔して「マオは、世界が自分を中心に回っていると思うてるのかいよて叱ってくれた。

ヒロ え

マオ そうなんだ、この間ヒロが兄さんと同じこと言ったんで、驚いた。そして、僕はヒ

「また、いつか…」と嘘つきディアナは言った。

ロと親友になりたいって思ったんだよ

ヒロ そうだったのか…

マオ でも、兄さんがどうして自分から戦争に行くことにしたのか、今でもわからないんだ

ハルカ なにか、わけがあつたんじゃないかな

ヒロ 俺もそう思うよ

マオ 兄さんに会って、兄さんの口から聞きたかった… 会いたいよ…

ロボット 「また、いつか…」

ヒロ・マオ・ハルカ !

ヒロ 今こいつ「また、いつか…」っていった

ハルカ …きつとお兄さんよ、マオ君のところに来てくれたんだよ

マオ うん…

間

ヒロ へへ、じゃ俺もいつていいか

ハルカ ヒロ君も？ 誰のお葬式？

ヒロ 俺の母さん

マオ 君のお母さん

ヒロ ああ、俺の母さん、俺が小さいときに死んじゃったんだ。で、葬式の時のことなんか全然覚えてないからさ、今できたらしいかなと思つてさ

マオ・ハルカ …

ヒロ しんみりするなって

俺さ、よくは覚えてないんだけど、でも、母さんのおいとか、あつたかさとか、何となく覚えてるんだよね

ハルカ ヒロ君

ヒロ 寂しくなると、記憶のずっと深いところにある母さんの感触を思い出す

「また、いつか…」と嘘つきディアナは言った。

マオ
：

ヒロ 母さんは、ヒロ、友達を大切にして、って言ってる気がするんだ。だから、俺とは全然違うマオを見たとき、こいつと友達になりてって思ったんだ。でも、よく見ると、結構わがままで優しくないし、なんだこいつって思ってた。

ハルカ 言い過ぎよ

マオ いいんだ、ヒロの言うとおりなんだ

ヒロ だから、なんか余計こいつと意地でも友達になってやるって思っちゃって、それでこの倉庫に来て、友達になって、そしたらすごくいい奴で

マオ そんなことないよ

ヒロ そんなことあるんだぜ、マオ

だから母さんに、俺、ちゃんと親友できたぜ、って報告したいと思うんだ

間

ハルカ 優しいお母さんだったんだね：

いいなー二人とも。私にはそんな人いないもんなー

ヒロ ；嘘つくな。お前、誓い、破る気か

マオ どうしたんだよ、ヒロ

ヒロ こいつにだって話しかけたい奴がいる筈なんだ。でも、いまこいつそれをごまかそうとした

マオ そうなの

ハルカ そんなんじや

ヒロ なんかしらねーけどよ、俺、人が嘘つくときわかるんだよ、なんか一瞬、あ、こいつ今嘘ிட்டって

ハルカ ；

ヒロ それで、マオは俺が今までであった奴のなかで、ただ一人そういう感じがしない人間なんだ

でも、こいつは嘘ばっかだなんて思う

間

「また、いつか…」と嘘つきディアナは言った。

ハルカ …ごめんなさい

マオ そんな、謝ることないよ

ハルカ ハルカの言うことの半分は嘘かも…

マオ え？

ハルカ ね、私のお葬式してくれない

ハルカ、そういつて寝ころぶ。その辺にあつた見すばらしい造花を胸に抱く

ヒロ おい、縁起でもねーことすんなよ。お前、生きてんじらんかよ

ハルカ 動こうとしない。

ヒロ なんだよ、こいつ

マオ どうすれはいいの

ハルカ 別れの言葉を言って

マオ 別れの言葉って

ヒロ なんか言つてやれよ、テキストに

マオ 適当に言われても。

ヒロ ああつ、面倒くせーな、

ヒロがやはり造花を一つもつてハルカの前に立つ

ヒロ えー、オッホン。ハルカさん。あなたは旅立ってしまいました。私たち二人の親友を残して。あなたは普段から、とても騒がしく、何かと人のことに口をはさみ、私たちは大変迷惑していました。

マオ 僕は別に迷惑じゃなかったよ

ヒロ ちつ。それからあなたはうそ泣き常習犯でした。マオはきつとこれからもだまされ続けるでしょう。それにあなたは妙にませていて、なんでも恋愛に結びつけて考える癖がありました。

マオ もつといいこと言つて上げてよ

「また、いつか…」と嘘つきディアナは言った。

ヒロ 私もそうしたいのは山々ですが、ないんです。でも、どうしてもというなら、…ちよつとだけ…

間

マオ どうしたの？

ヒロ いやなんでもねー

自分の葬式ごっこするなんて馬鹿なことはもう考えるな

ハルカ、起き上がる

ハルカ ありがとう。私が本当に死んだら、今みたいに私にお別れの言葉を言ってね

ヒロ ふざけんな

ハルカ 私、病気なの

マオ え

ハルカ ずっとこうしていたい

ヒロ なぜ、本当のこと言うんだよ

ハルカ え？

ヒロ お前は、ずっと嘘ついてりやいいんだよ

ヒロ、倉庫を出て行く

マオ ヒロ！

ハルカ ごめんなさい

マオ うそなんだろ

ハルカ …うん、嘘。まただまされたね

マオ …

ハルカ ごめんね、嘘ばっかで

間

マオも出て行く。ハルカまた静かに横になる。

そして泣く。
ディアナの目にかすかな灯が入る

5

再び過去
桜吹雪が見える

チヒロ ディアナ：桜が咲いたわ

ディアナ …

チヒロ きれいでしょ

ディアナ …

チヒロ 知ってる？ 北海道って5月に桜が咲くのよ

子供のころいつも思った、ドラマや映画では4月入学式に桜が咲くの、どうしてここでは1ヶ月も遅く咲くのかしらって

ディアナ …

チヒロ 最初はドラマの方が間違ってるんだって思った。でもいつか、そうじゃないってわかってくる

ディアナ …

チヒロ ああ、ここはこの国の中心でじゃないんだって

ディアナ …

チヒロ ふるさとが消えた日に、それをいやというほど思い知ったわ

ディアナ …

チヒロ 桜が一番早いところでは1月に咲くの

どこでも3月や4月に咲く訳じゃないのよ

ディアナ …

チヒロ ディアナ、私妊娠したの

ディアナ …おめでとう、チヒロ

「また、いつか…」と嘘つきディアナは言った。

チヒロ ありがとう、私にも希望が生まれた…。だから、あなたのことも許してあげようと思う

ディアナ …チヒロ

チヒロ あなたを取り戻そうとして若者達が義勇軍を作ったそうよ。もつとも、失敗に終わったようだけど…

あなたの不在が世に知れたらきつと大パニックになるでしょうね

ディアナ チヒロ、許してくれるのでしょうか？私をルナ・プロセルピナと話せるようになって

チヒロ それはダメ。私はそこまで寛大な人間じゃない。

ディアナ この世界はどうなるの

チヒロ 世界はもうどうでもいい。…あなたをあらゆるネットワークから遮断された、どんな電磁波も届かない暗い倉庫に置き去りにしてあげる。その代わり言葉を一言だけ言えるようにしておくわ

ディアナ …チヒロ、許して、それでは今と同じ…

チヒロ ディアナ、私あなたのことが本当に大好きなのよ。これは私の友情の証よ。運が良ければ誰かがあなたを発見してくれるでしょう

ディアナ …チヒロ。あなたが許せないのは、私のことではなくて、私を作ってしまったあなた自身なんですよ。あなたは、自分の作ったAIの裁定に責任を感じ、自分を責めているの

チヒロ、笑い始める

チヒロ あなたの嘘にはもうだまされれない。笑わないの、あの日みたいに。あなたの言っていることなんて全部嘘なんですよ

ディアナ もう自分を許してあげて…チヒロ

チヒロ、落ち着きを取り戻し

チヒロ …あなたが一言だけ言える言葉、何がいい？

ディアナ …

チヒロ あなたが選ぶのよ

ディアナ …「また、いつか」

チヒロ ええ、そうね。また、いつか…。
じゃあね、おやすみ

チヒロ、部屋を出ようとする

ディアナ チヒロ

チヒロ 立ち止まる

ディアナ 私、あなたのことが、本当に大好きなのよ

チヒロ、ディアナの方は振り向かず去る。部屋の電気が消える。

6

七年後の嵐の夜

マオが倉庫に一人たたずむ。

そこにヒロがずぶ濡れながら入ってくる

稲光・雷鳴

ヒロ どういうことだ。マオ

マオ …

ヒロ どういうことだって聞いてるんだ

マオ どういうことって、君が見たとおりのことだよ、ヒロ

ヒロ ふざけるな。北部方面第一連隊の出発は今日だったんだ

マオ そうか

ヒロ このチャンスを逃したら周期の関係で、来年の春まで、いや正確に言って来年の三月十八日から二十四日までの一週間が来るまで飛び立てない

マオ …そうなのか？

ヒロ …そうなのか、だと。とぼけるな。お前が反政府組織の中心人物であることは誰だって知っている。

マオ 僕もずいぶん有名人名人になったわけだ

ヒロ ふ、ふざけるな！わかってるのか。俺があえてお前の行動を追跡できないように

「また、いつか…」と嘘つきディアナは言った。

マオ遮り

マオ ヒロ、そんなこと頼んだ覚えはないよ

ヒロ お前は権力を甘く見過ぎだ

マオ …

ヒロ 俺は親友を失いたくない

マオ 君は小学校のころ、弱いモノを助け、権力に立ち向かうヒーローだったじゃないか

ヒロ …

マオ いつから、そっち側の人間に寝返ってしまったんだ？

ヒロ マオ、お前こそルールは絶対だと言ってどんな事情があっても悪事を許さないそんな男だったじゃないか

マオ 僕が変わったとでも？

ヒロ お前は、兄さんの無念を忘れたのか？

マオ ヒロ、君は僕の何もわかってないんだな。よく親友になろうなんて言えたもんだ

ヒロ わかり合っていたから親友になろうとしたんじゃない、わかり合うために親友になろうと言ったんだ

マオ ヒロ、そんなことは…どっちでもいい

ヒロ どっちでもいいだつて？

マオ 君を見ていると、無知だと言うことがどれほど惨めで残酷か痛いほどよくわかるよ

ヒロ 無知？

マオ そうだ

ヒロ 無知、なるほど俺はガキの頃からバカだったからな。知識なんて何も無い。でも、人の痛みとか悲しみはわかっているつもりだ。お前よりな

マオ、ヒロの胸ぐらをつかむ

マオ それが無知だと言っているんだ。いい加減に目をさませ

問

マオ ヒロ、僕は君に隠していたことがあるんだ。

ヒロ 隠していたこと？

マオ 僕たちはもう会わない方がいいし、多分会えなくなる。だから、言っておく。君に最初にあった日に、このロボットを僕は知っていると聞いたよね。そして僕の知る限りの知識を君に伝えた。

ヒロ ああ、そうだった。あのときの俺には難しくて全然わからなかったけど、今考えたら大変な内容だったと思うよ。

マオ そうだ、僕はこれが、例の自己連想記憶型ファジーシステム搭載ロボットのプロトタイプだと思ったんだ

ヒロ ああ、お前はそう言ったよ、確かに

マオ でもそれは間違いだった。これはディアナだ

ヒロ ああ、ディアナだ。ハルカがそうつけたんじゃないか

マオ そうじゃない。僕たちの進むべき道を示す三姉妹ルナ、ディアナ、プロセルピナのうちの一人のディアナなんだ。北海道を消し去る裁定をくださった三姉妹の内の一人だ。

ヒロ まさか

マオ 僕も最初は信じられなかった。でも僕たちは今、証拠を握っている。そしてそれは、僕の兄さんがなぜ志願して戦場に赴いたのかを解き明かすキーでもあったんだ。

ヒロ だけどハルカはどうしてディアナって名前を知っていたんだ

マオ 彼女はこのロボットを作った鳴海博士の娘だ

ヒロ ハルカが？

マオ デИАナなき後、僕たちはずっと違う一体が補完されて運用されていると思っていた

ヒロ 違うのか？

マオ 違うんだ。今、機動しているのはルナとプロセルピナの二体だけだ。

ヒロ 何だって！

「また、いつか…」と嘘つきディアナは言った。

マオ 僕たちはずっと不完全な判断システムが下す決定の為に翻弄されてきた、いや今も
だ

ヒロ そんな馬鹿なことがあつてたまるか、デマだ。お前達が作り上げたでたらめだ

マオ 僕だつてそう思いたい。でもこれは事実なんだ。

ヒロ いったい誰がディアナをこんな所に置き去りにしたんだ

マオ それは

ヒロ 知っているんだろう、マオ。教えてくれ

マオ …

ヒロ 親友には嘘をつかない。俺たちの誓いだ

マオ わかった。…ディアナをここに置き去りにしたのは、ハルカの母親、鳴海博士だ

ヒロ 何だつて！じゃあハルカがこのロボットにディアナつて名付けたのは…

マオ ハルカは知ってたんだと思う。自分の母親がしたことの意味もね

ヒロ あいつ、一言もそんなこと…

マオ 外の様子がおかしい

ヒロ しまった！

マオ とりかこまれたか、まあ想定内だが

ヒロ 俺が出て行って説得する。

マオ 間だ ヒロ、君の話なんか誰も聞いてはくれないよ。出て行ったときが君の人生最後の瞬
間だ

ヒロ まさか

マオ 君はずっと監視されていた。僕やハルカとの接点を得るために泳がされていたんだ

ヒロ ……俺って本当にバカだな

マオ そんなこと言ってる暇はない

「また、いつか…」と嘘つきディアナは言った。

ヒロ どうするんだ

マオ ディアナをネットに接続する

ヒロ どうやって

マオ ヒロ覚えてるか、ここを発見したところ、電話線を地下まで引いてきたじゃないか

ヒロ そんなこともあったっけか

マオ こうなってみると、有線の方が無線より遥かに役に立つ

ヒロ 俺たちについてるんじゃないか

マオ ディアナは死んでない。だから彼女をネットの大海原に放り込む。そこまでできれば、僕たちは生きた甲斐があったってもんだ。たとえここで人生を終えるとしてもね

間

マオ 僕たちは多分、生きてここから出られないだろう

ヒロ まあな……。じゃあ、俺は連中がここに来るのを少しでも遅らせてみるか。どんな方法で突入してくるかは、さっきまで味方だった俺はよく知ってるんでね

マオ 油断するな、連中は君が裏切ることも想定済みだぞ

ヒロ 心配するな、裏の裏かくのはガキのころから大得意だぜ

ヒロ 下手に行こうとして立ち止まる

ヒロ マオ、もしかしたらこれが最後になるかもしれないから言うっておく

マオ …

ヒロ お前にあえてよかったよ

マオ 僕もだ

ヒロ もし、運良く今日生き残れたら、どうする

マオ また、いつか、ここで会おう

ヒロ よっしゃ、行ってくる

暫くして爆音

「また、いつか…」と嘘つきディアナは言った。

マオも走っていく
ディアナの目に灯がはいる

しばらくしてマオが帰ってくる

マオ 一秒でもつながられば、ディアナにとっては僕たちの一年分くらいの長さだ
神に祈ろう

マオ ロボットなどの背後に入って姿を消す
ヒロが腕を抑えて入ってくる

ヒロ へへへ、勝手知ったる我が家だからな、俺たちの方が有利だぜ

そこへマオが転がり込んでくる

ヒロ マオ、大丈夫か

マオ ああ、君よりは遙かにね、あったよケーブル

ヒロ おう、あのときの電話線か

マオ こいつをディアナにつなぐ、それで僕たちのミッションは完了だ

爆音激しくなる

ヒロ あと3分くらいしかもたないな、わりい

マオ 十分さ

マオがロボットの背後に向かう

ヒロ マオ、お前、ハルカのこと好きだったか

マオ なんだよ、この忙しいときに

ヒロ 俺は、好きだった

マオ 知ってたよ

ヒロ そうか

マオ たぶん、ハルカも君のことが好きだったと思う

ヒロ お前の方だろう

「また、いつか…」と嘘つきディアナは言った。

マオ いや、君だ。

ヒロ そうか

マオ また、三人で集まりたいな

ヒロ ま、あと3分もすれば、その夢はかなうと思うね

マオ 今度生まれてくるときも、またいつかここでめぐり合おう

ヒロ じゃ、誓いの言葉だ

マオ よし、なんとかつながった。後はディアナに任せよう

誓いの言葉か、

ヒロ 忘れちゃったんだろ

マオ それはヒロの方だろう

ヒロ やるか

BGM
激しい戦闘音

ヒロ・マオ 私、山口マオと、武蔵川ヒロは、山の神、海の神、

爆音

ディアナが起動し、空中に舞い上がる

ヒロ・マオ 空の神、大地の神、川の神、湖の神、池の神、沼の神、

ディアナ ルナ・プロセルピナ、回路を開いて。私よ。嘘つきディアナが帰ってきたのよ。
今行われている全ての戦闘行為の中止を求める。裁定に与えられた時間は5秒よ

ヒロ・マオ 下水の神、丘の神、道の神、雲の神に誓って言う

ディアナ ルナ・プロセルピナ・ディアナの名によって全ての戦闘行為の中止を命じる

ヒロ・マオ 私たち二人はまたいつか

ディアナ また、いつか…

ヒロ・マオ 必ずこの場所で会うことを誓う

ヒロ ぜってーだな

「また、いつか…」と嘘つきディアナは言った。

マオ 親友に嘘はつかない

二人は手を握る。マオの手首にはリストバンド。ヒロはペンダントを胸の辺りで握る。

ヒロ あの嘘つき女も混ぜてやろうぜ

マオ 勿論だ

ヒロ へへへ…あれ
音がやんだな

ヒロとマオが振り返ると、空中にディアナが浮かんでいる

了

二〇二五・八・七〔第一稿〕

九・七〔第二稿〕

十・三一〔第三稿〕